

商業企業としてのたたら製鉄

18 世紀に入ると、たたら製鉄所はより高度に統合された生産工程を採用した。製錬された金属のほとんどは、販売する前に、より高品質の製品に精錬される必要があった。これを容易にするため、多くの製鉄所は低品位の鉄を販売可能な鉄塊に変える鍛冶場を開いた。

この新しい配置の 2 つの主要な施設は、高殿作業場と鍛冶場であった。大きな高殿作業場では、村下を中心とした作業員が炉を操作し、原料を製錬して鉄や鋼を作った。この工程が終わると、銑鉄やその他の低級金属をは鍛冶場で精錬するために分離された。

鍛冶屋は鉄を再溶解し、槌で叩いて炭素を減らし、铸塊と呼ばれる平らな棒に鍛造した。この铸塊を日本語では「割鉄」または「包丁鉄」と呼んだ。この精錬された鉄は全国に出荷され、農具、調理器具、マッチロック式火縄銃など、さまざまなものに使われた。製錬と精錬の両産業によって、奥出雲地方は鉄の交易で一躍脚光を浴びたのである。